

# ケイムブリジでのスラッファ

——J-P. Potier『ピエロ・スラッファ—異端の  
経済学者（1898-1983）』を読んで——

松 本 有 一

## 序

経済学者の業績に対する評価は公刊された著書・論文によってであることはいうまでもない。だが経済学の歴史に名をとどめているような人物の場合、その人の経済理論だけでなく多方面から関心をもたれることが多い。ピエロ・スラッファ（Piero Sraffa, 1898-1983）もその一人である。十分に解明されているとはいえないが共産主義活動家 Antonio Gramsci や哲学者 Ludwig Wittgenstein との関係はよく知られている。ケインズ（John Maynard Keynes）とスラッファとの関係についても同様である。<sup>1)</sup>

スラッファに関する伝記的な記述がこれまでなかったわけではないが、断片的であるか概略的なものであった。<sup>2)</sup> 独創的な思想家の生涯を再構成することは魅惑的である。<sup>3)</sup> これが Jean-Pierre Potier に『ピエロ・スラッファ—異端の経済学者（1898-1983）』（Potier (1991)）を書かせたのである。彼の本は最初1987年にフランス語で刊行され、その後イタリア語版が出され、1991年に英語版が出

- 
- 1) 原則として人名は原綴で表記したが、スラッファとケインズは片仮名表記にした。地名も片仮名表記である。Cambridge はケイムブリジまたはケインブリジと表記するのが原音に近いと思われる。Sraffa (1951) の邦訳で訳者・堀経夫は「ケインブリジ」を用いているが、本稿では「ケイムブリジ」とした。
  - 2) 日本で比較的に利用しやすい文献をあげると、Pasinetti (1979), (1988), Kaldor (1989), Roncaglia (1981), Porta (1984), Eatwell and Panico (1987), 藤井 (1987) などがある。
  - 3) Potier (1991), Preface 参照。

<sup>1)</sup>た。「英語版の本文はフランス語原本の改訂版である」<sup>2)</sup>(Potier (1991), p. ix).

「スラッファの生涯に関する詳細な情報は稀少で、非常にさまざまに異なった分野の著作に散らばっている」(Potier (1991), p. viii). そのため Potier は多くの文献とさまざまな文庫にある未公刊の資料を渉猟して貴重な情報を与えてくれている。イタリアでのスラッファについては特にそうである。それはスラッファが1927年にケイムブリジに移る以前だけでなく、それ以後についても<sup>3)</sup>である。彼の本はイタリア語文献に接近しにくい者にとっては貴重な、目新しい情報を与えてくれる。

Potier は未公刊のスラッファの手紙や資料を求めて、ミラノの Feltrinelli 財団、ローマの Gramsci 財団、トリノの Luigi Einaudi 財団の文庫を訪れ、さらにアメリカ、Harvard 大学の Schumpeter 文庫にまで足を伸ばしている。だが彼自身書いているように、Potier の調査には一つの大きな欠落がある。それはスラッファが50年以上過ごしたイギリス・ケイムブリジでの調査である。Potier がケイムブリジでの調査をしなかった理由は書かれていないが、彼も書いているように Sraffa Papers が公開されていないということがその最大の理由と想像される<sup>4)</sup>。かりにそうであったとしても、ケイムブリジで調査をしなかったことは彼の本の欠陥といわざるをえない。なぜなら、Poier の本に書かれたケイムブリジにおけるスラッファの経歴については、公式の記録などに照らし合わせてみて誤っている記述が多いように思われるからである。それらはスラッファの理論を理解する上で支障がないかもしれないが、スラッファのケイムブリジにおける経歴に関しては、スラッファとケインズとの関係を考える

- 
- 1) フランス語版は *Un Économiste Non Conformiste PIERO SRAFFA (1898 – 1983), Essai biographique*, Presses Universitaires de Lyon, 1987 である。
  - 2) それゆえ本稿では英語版の記述を検討の対象にしている。
  - 3) スラッファはケイムブリジに移ってから、年3回の休暇(学期と学期の間の休み)にはほとんどイタリアに帰って過ごしたり、旅行をしたりしていた。
  - 4) Sraffa Papers はスラッファのノート、遺稿類を含むが全容はまだ明らかにされていない。それは出版されるまで公開されないことになっているが(Sraffa Papers を保管している Trinity College の意向であるようだ)、この点筆者はスラッファの Literary Executor (遺著管理者)である Garegnani 教授から確認することができた。

上で特に重要な論点であり、客観的な資料にもとづく必要があろう。これまでもケイムブリジでの資料・調査にもとづいて書かれているはずのスラッファに関するいくつかの著述のあいだに若干の相違があることから、筆者は一次資料での調査・確認の必要性を感じていた。幸い筆者は1991年4月からケイムブリジでの調査・研究の機会を得、いくつかの資料を調査することができた。本稿はその成果の一部である。

ケイムブリジでのスラッファの経歴を調べる上で一般に利用できる、そして多くの情報を与えてくれる資料としては University of Cambridge の公報である *Cambridge University Reporter* がある（以下では *Reporter* と略記する）。また大学関係の定期刊行物やコレッジ (College) の出版物も貴重な情報源である。現在ではスラッファの蔵書である Sraffa Collection (Wren Library, Trinity College) のほか、J. M. Keynes Papers (King's College Library), J. V. Robinson Papers (King's College Library) などが一次資料として利用できる<sup>1)</sup>。Sraffa Papers は未公開だが、これらの資料は貴重な情報を提供してくれる。これまでもこれらの資料にもとづいた報告がなされているが、十分な調査がなされなかったようである。ケイムブリジでのスラッファに関する Potier の記述にはいちいち典拠が記されていない場合があるが、二次資料の誤りが再現されたり、不適切な読み込みがなされていることがある。本稿はそれらの誤りを訂正することに限定されるが、必要なかぎりスラッファについて書かれた関連の文献にも言及する。ケイムブリジでのスラッファに関するより詳細な記述は将来を期したい。

以下、やや細かい点を含めて、Potier の記述で特に疑問の箇所を指摘し可能な限り訂正するとともに、筆者の見解を示したい<sup>2)</sup>。

- 1) Sraffa Collection には約8400点の書物（多くの稀観本を含む）が所蔵され、公開されている。この中にはスラッファ自身の著作も、すべては揃っていないが、含まれている。Kaldor (1989) その他で Marshall Library (Faculty of Economics and Politics の図書館) 所蔵とされている Keynes Papers は、現在ではすべて King's College に移管されている。
- 2) 各節の最初に検討の対象となる Potier (1991) の記述を原文（英語）で引用し、うしろにそのページ数を示す。

## 1 ケイムブリジでのスラッファの住居

“When he arrived in Cambridge at the end of September 1927, Keynes personally helped him to settle in, finding him accomodation in the college building (17b St Edward’s Passage) in which he himself had a flat and where he stayed with his wife Lydia for weekends in Cambridge” (p. 44).

スラッファはケインズの勧めに応じ University of Cambridge の University Lecturer in Economics の募集に応募し、まず3年間の任期でその職に任命された<sup>1)</sup>。ケインズはスラッファのために King’s College の宿舎を世話したが、スラッファが最初住んだのは “G, Gibbs’ Building” で、その後 “3 Trumpington Street”, “6 St Edward’s Passage”, “15 King’s Parade” と替わった<sup>2)</sup>。

“17B St Edward’s Passage” に住むようになったのは1937年からであり、間もなく父親 (Angelo Sraffa) の死後イタリアから移ってきた母親 (Irma) と一緒に住むことになる。スラッファは1939年に Trinity College の Fellow になって Nevile’s Court に部屋を持ったが、母親の生前は “17B St Edward’s Passage” に引き続き居住した。ケインズはロンドンに住居を持っていたが、週末は King’s College 関係の仕事のためなどでケイムブリジで過ごした。College

- 
- 1) University of Cambridge では1926年10月から実施された大学の組織改革に先立って各学部間での教員 (Lecturer と Demonstrator) 配分を検討する委員会が設けられた。一定の割当が行われた後、最終的な配分案が出されたのは1926年7月21日付報告書によってであり、1926-27学年度では財政的には教員増員枠が残されていた。1926年10月時点では Faculty of Economics and Politics の Lecturer は10名であったが、Faculty Board は大学に対し2つの Lectureship の増設を要望し、それが認められることになった。Lecturer in Economics と Lecturer in Economic History である。実質はともあれ形式的には公募で、その記事が *Reporter* (3 MAY 1927) に掲載されている。スラッファはケインズの勧めでこれに応募したのである (競争相手があったようには思われない)。Kaldor (1989) にこの時のケインズとスラッファとの間の書簡が紹介されている。Kaldor は任期4年と書いているが、University Lecturer の任期は規定により最初は3年である。詳細は拙稿「スラッファの人事問題におけるケインズの力」(近刊予定) 参照。
  - 2) *Resident Members* (October 15, 1927) 以後の各号。 *Resident Members* は住所録で *Cambridge Review* の特別号 (Extra Number) として毎学期のはじめに刊行されていた。現在は年1回になっている。

の Webb's Building に彼の部屋があった。ケインズが “17A St Edward's Passage” に移ったのは1937年5月であった。<sup>1)</sup>

## 2 ケイムブリジでのスラッファの講義

“When he arrived in Cambridge, he asked Keynes whether his teaching could not be postponed for a few months, to give him time to improve his command of English. Keynes accepted and, in the autumn of 1928, Sraffa started a course on the history of theories of value called ‘Advanced Theory of Value’, and a course on the banking systems of Italy and Germany” (p. 44).

これらの記述は A. Roncaglia によっているようだが、スラッファが講義の延期をケインズに請い、ケインズがそれを受け入れたというのは確実な典拠があるのだろうか。確かにスラッファがケイムブリジに來た経過を考えれば、講義の延期をケインズに相談したことは想像に難くないが、ケインズにそれを認めるかどうかの権限があったのだろうか。講義開講の責任は Faculty Board にあり、ケインズは Faculty Board のメンバーの一人であったが、実務上の責任者は Faculty Board の Secretary である。Austin Robinson は次のように書いている。「1930年、Pigou が私を Faculty Board の Secretary にし Faculty Board の下でスタッフと講義の編制に責任を持たせてまさにすぐに、ピエロ・スラッファは私のところへやって来て、Lecturer の職をやめさせてほしいと願い出た。彼は Marshall Library の Librarian にとどまったが、われわれは少し後に彼を Assistant Director of Research にするよう取り計らった。……彼はもはや講義をする必要のない University のポストを得ることが

1) Keynes (1983), p. 14, *Resident Members* でケインズのケイムブリジでの住所が “17A St Edward's Passage” となったのは “October 18, 1939” 号からで、それまでは “P, Webb's building” となっていた。スラッファの住所が “17B St Edward's Passage” となったのは “October 11, 1937” 号からで、二人は実際には同じ頃 St Edward's Passage のフラットに部屋を持ったのかもしれない。17A は2階、17B は3階である。

できたのである」(Robinson (1977), p. 29). Austin Robinson が University Lecturer になり Faculty Board の Secretary になったのは1930年10月であった。<sup>1)</sup> A. C. Pigou はこの時 Faculty Board の Chairman であった。

スラッファがケイムブリジでいつからいつまでどのような講義をしたかについては諸説がある。1927年10月から講義をしたという説と、1年間講義は延期され1928年からだという説である。<sup>2)</sup> 講義といってもいくつか種類があるが (Faculty での講義か College での講義か, Undergraduate 対象か Postgraduate 対象か), スラッファは University Lecturer in Economics に任命されケイムブリジに来たので, Faculty of Economics and Politics での Undergraduate 向け講義を考えることにしよう。

講義に関して公式の記録として利用できるものに *Cambridge University Reporter* に掲載される講義リストがある。Porta (1984) は *Reporter* を利用しているが調査が不十分だったようだ。まず第一に問題になるのは1927-1928学年度の講義である。

*Reporter* (30 JUNE 1927) に次学年度 (1927-1928学年度) の暫定的な講義リストが掲載されていて, スラッファの講義は Michaelmas Term に “The Theory of Value” (週2回) が開講されることになっていた。 *Reporter* (4 OCTOBER 1927) 掲載の講義リストでは講義名が “Advanced Theory of Value” となり, Lent Term (1928) にも同じ講義が引き続いて行われることになっていた。ところが, *Reporter* (18 OCTOBER 1927) に掲載された “Lecture-

1) A. Robinson が Lecturer になったのは1929年であると Potier (1991), p. 88, note 11 では書かれているが, 正しくは1930年である。 *Reporter* (13 MAY 1930) に1930年10月1日付で彼の University Lecturer への任命が公表されている。また Faculty Board のメンバーは毎学期 (Term) の初めに *Reporter* に掲載されている。

2) 例えば, 前者は Porta (1984), Eatwell and Panico (1987), 後者は Roncaglia (1981), Kaldor (1989) である。また藤井 (1987), 151ページには, スラッファは「第一回目の講義を半ばで中断して, 以後は全く講義を行なわ」なかったという説が紹介されている。King's College の *Annual Report* に掲載されたスラッファの Obituary には, Lecturer 辞職後スラッファは「少なくとも英語では, 決して再び講義をしなかった」と書かれている (King's College (1984), p. 75)。

List : Corrections” の記事のなかに “Mr Sraffa’s lectures on the Advanced Theory of Value are postponed until the Lent Term” とありスラッファの講義が延期されたことがわかる。そして Lent Term の講義開始前の *Reporter* (10 JANUARY 1928) の講義リストでは “Advanced Theory of Value” は Lent Term と Easter Term に開講されるようになっていたが、今度は *Reporter* (17 JANUARY 1928) 掲載の “Lecture-List : Corrections” で “Mr Sraffa’s lectures will not be given” となり、Easter Term 開始前の *Reporter* (18 APRIL 1928) 掲載の講義リストからはスラッファの名前すら削除されてしまった。1927-1928学年度、スラッファの講義は予定されていたが、実際には行われなかったのである。

以後の学年度について *Reporter* 掲載の講義リストからスラッファの講義が次のように行われたと考えられる（訂正記事は見当たらなかった）。

1928-1929学年度と1929-1930学年度には Michaelmas Term と Lent Term に “Advanced Theory of Value” が、Easter Term に “Banking on the Continent” が、各々週2回（1回は60分間）行われた。1930-1931学年度は、スラッファが Lecturer をやめたいと願い出たことと関係があるのか、Michaelmas Term は講義がなく Lent Term と Easter Term に各々週2回 “Advanced Theory of Value” の講義が行なわれた。

これまでケイムブリジでのスラッファの講義といえば、彼の University Lecturer 時代（1927-1931年）のそれしか問題にされなかった（講義をしたのかしなかったのか、何を講義したのか）。ここでスラッファの Faculty of Economics and Politics での講義について補足しておこう。スラッファは1931年9月30日付で University Lecturer の職を辞<sup>1)</sup>し、1935年に Assistant Director of Research として University の職（College の職ではない）に復帰したが、この職は

1) スラッファの University Lecturer としての任期は最初3年であったが、再任されて任期は停年までとなった。再任は *Reporter* (26 MARCH 1930) に、辞職は *Reporter* (24 JULY 1931) に公表されている。

Research Students の指導がその職務であって講義は義務づけられていない。また、スラッファは停年（University の職は特別な例外を除いて67歳になった学年度の終わりまでに退職しなければならない）<sup>1)</sup> の2年前の1963年に Reader になっているが、Reader であった2年間も講義をしなかったようである。この2年間の講義リストにスラッファの名前は見当たらない。

しかし、1931年より後スラッファは Faculty でまったく講義をしなかったかというそうではなかった。当該年度の *Reporter* 掲載の講義リストによれば、スラッファは1940-1941学年度の Lent Term と Easter Term、そして1941-1942、1942-1943学年度の Lent Term に各々週1回 “Industry” を講義している。この時期、Faculty of Economics and Politics のスタッフの幾人かは戦時のため政府機関に出向していて講義担当者が不足していたため、スラッファが講義を引き受けたものと考えられる。

### 3 スラッファの辞職と替りの職

“In 1931 he [= Keynes] obtained for Sraffa the recently created post of Librarian at the Marshall Library of Economics, a post Sraffa held until 1973. Keynes also had created, especially for Sraffa, a Directorship of Research at King’s College. . . , Towards the end of the thirties, Sraffa asked to be demoted to Assistant Director of Research, in order to have more time for his own research, and held this post until 1963” (p. 46, [ ] 内は引用者)。

“In 1963 Sraffa, then sixty-five years old, retired from his post as Assistant Director of Research, but was an Emeritus Reader in Economics at Trinity College until 1965, and stayed on as Librarian at the Marshall Library of Economics until 1973” (p. 73)。

スラッファは University Lecturer を辞職した後もケイムブリジに留まって

1) Statutes (1985), p. 29.



いたが、その時のことを N. Kaldor は次のように書いている。「ピエロをいたく気にいていたケインズは、彼をケイムブリジから離したくなく急いで二つの仕事を準備し、数年遅れてそれに第三の仕事を加えた。一つは Marshall Library の Librarian という新たに (newly) 設けられた職である。……第二は、Royal Economic Society が企画した David Ricardo の著作集の編集者への任命である。第三は、研究生を全般的に担当する Assistant Director of Research という今一つの新しい (another new) 職である」(Kaldor (1989), pp. 291-292)。この内容もここで合わせて取り上げることにする。

スラッファが Marshall Librarian になったのは1931年であると Potier が典拠にしているケインズの Mary Paley Marshall (Alfred Marshall 夫人) 追悼文では書かれているが、1939年の終わりか1940年の初めころに書かれたと思われるスラッファの自筆履歴書 (Keynes Papers 所蔵) では1929年となっている。ただしケインズも書いているように「中断」があったが、それは1934-35年の頃で、スラッファの履歴書では Rockefeller Fellowship としてアメリカへ行くことになっていたためだとある。Marshall Library は1925年に設立されているが、Librarian の職は D. H. Robertson が最初に務めており、スラッファのために新設された職ではない。<sup>2)</sup>

Kaldor はスラッファが University Lecturer を辞職したと Ricardo 著作集編集者への任命とを結びつけて考えているが、いくつかの点から疑問がある。Ricardo 著作集の編集が前任者の T. E. Gregory からスラッファに引き渡されたのは1930年3月で、スラッファはただちに作業を開始したのであった。<sup>3)</sup> スラッファがこの時点ですでに Lecturer の辞意を表明していたかどうか疑問

1) Keynes (1971-89), Vol. X, p. 249.

2) Keynes (1971-89), Vol. X, p. 249. Marshall Library の簡単な歴史については *Reporter* (28 MARCH 1969), p. 1247 および Marshall Library (1927) 参照。後者には当時の Librarian として D. H. Robertson の名が明記されている。

3) Pollitt (1988), p. 58 参照。1930年3月22日付の手紙でスラッファはケインズに宛て、Dobb, Kahn, Isles と共にした5日間の Ricardo, *Principles* の各版対照作業を前日に完了したことを知らせている (Keynes Papers)。

である。第一に、第2節で引用したようにスラッファが Lecturer の辞職を Austin Robinson に申し出たとすれば、それは A. Robinson が正式に Faculty Board の Secretary に就任した1930年10月であったか、あるいは就任が決定していた時点であったとしても3月より前とは考えにくいからである。なぜなら、A. Robinson の1930年10月1日付での University Lecturer 任命が決定されたのが1930年5月であったからである。Faculty Board の Secretary 就任決定はそれ以前であったとは考えにくい。

第二は、スラッファの University Lecturer 再任決定の時期である。University Lecturer の任期は最初3年で、再任されることによって停年までということになる。スラッファが University Lecturer に再任されたことは *Reporter* (26 MARCH 1930) に公表されている。仮にスラッファの辞意が1930年3月までに表明され、Ricardo 著作集の編集者の職が Lecturer の辞職に替わるものであったとするならば、Ricardo 著作集編集者への任命と Lecturer 再任がほぼ同時期であったということはどう説明したらよいのだろうか。

スラッファが University Lecturer を辞職した時点では、彼はすでに Royal Economic Society の出版事業である Ricardo 著作集の編集者に任命され、スラッファの履歴書どおりであれば、また A. Robinson が書いているとおりであれば Marshall Librarian であり、Lecturer 辞職後もその職にあった。当時、Marshall Librarian は University の職ではなく、Faculty of Economics and Politics で任命される職であった。したがって Lecturer を辞めた後もスラッファは Faculty のメンバーだったのである。ところが、1935年10月1日付で Assistant Director of Research としてスラッファは University の職に戻るようになる。この職の主たる仕事は Research Students の指導であり、スラッファは1963年までこの職を務めた。Assistant Director of Research が University の職として正式に位置付けられるまでにはいろいろと経過があったがここではそれには立ち入らない。ここで確認しておきたいのは Assistant Director of Research は University の職であって King's College の職ではない

ということである。スラッファが Directorship of Research から Assistant Director of Research に降格 (demote) を求めたと Potier は書いているが、そもそもスラッファが King's College の Directorship of Research になったことの典拠は示されていない。Potier も書いているように、スラッファは 1939年に D. H. Robertson の後任として Trinity College に Fellow として迎えられた (次節参照)。もし Potier が書いているとおりだとすると、スラッファは Trinity College の Fellow になった後も King's College で Assistant Director of Research を務めていたことになる。

スラッファは 1963 年に Assistant Director of Research から Reader in Economics になった。「昇任」といってよいだろう。University の職の停年が 67 歳なのでその 2 年前である。スラッファは停年で 1965 年 9 月 30 日をもって University の職、すなわち Reader を退き、Emeritus Reader となった。これらのことも Potier が書いていることとは異なる。しかしなお、スラッファはその後死ぬまで Trinity College の Fellow であり、Faculty of Economics and Politics のメンバーであった。<sup>1)</sup>

#### 4 スラッファが Trinity College の Fellow になる

“In 1939, Robertson resigned from his post at Trinity College to teach at the London School of Economics, . . . . Sraffa succeeded Robertson at the end of the year, thus becoming a Fellow of Trinity College” (p. 46).

D. H. Robertson は 1914 年から Trinity College の Fellow で、University の職としては 1924 年に Lecturer になったあと 1930 年に Reader になっていた。彼は London School of Economics and Political Science (以下では LSE と略記する) に Professor として移るため 1938 年の終わりにケイムブリジでの職を

---

1) スラッファの Reader への任命は *Reporter* (20 NOVEMBER 1963) に公表されている。この時 University 全体で 6 つの Readership の設置があった。*Reporter* には毎年各 Faculty のメンバー一覧が掲載されている。

辞した<sup>1)</sup>。この時彼は Faculty Board (Economics and Politics) の Chairman も務めていた。Robertson は学年度の途中でケイムブリジからロンドンに移ったのである。学年度の最初の講義リストでは彼の講義は年間を通して開講されることになっていた。急な移籍といってよいだろう。

Robertson が辞任をしたあとすぐに、その後任に迎えたいとスラッファに対し Trinity College からの申し出があったようである<sup>2)</sup>。しかし、スラッファが Trinity College の Fellow に選任されたのは1939年10月1日付であり、同時に College の Lecturer in Economics にも任命されている<sup>3)</sup>。College の Lecturer としては、少なくとも週6時間の授業 (teaching) があったようである<sup>4)</sup>。

## 5 スラッファはマン島に収容された

“In May 1940, the ‘phoney war’ on the western front ended when the Germans invaded France and started their relentless bombing of England. The British government, faced with the activities of the Axis countries, decided on the immediate arrest of all Italian and German citizens. Sraffa, who held an Italian passport, was arrested in Cambridge, and taken to an internment camp on the Isle of Man, where he met some anti-Nazi German intellectuals, including H. W. Singer, Edward Rosenbaum (who had been Director of the Commerzbibliothek of Hamburg), and Erwin Rothbarth, who had helped Keynes prepare the brochure *How to Pay for the War*

- 
- 1) 筆者は Robertson の辞任の正確な日付けを確認できなかったが、Historical Register (1942), p. 14 では彼の Readership 在任期間は「1930－1938」となっている。彼は1944年に A. C. Pigou の後任の Professor of Political Economy としてケイムブリジに復帰している。
  - 2) 1938年12月28日付のスラッファから Joan Robinson への手紙 (J. V. Robinson Papers, King's College, Cambridge)。
  - 3) *Reporter* (17 OCTOBER 1939), p. 183 および Trinity College (1939), p. 7, p. 13. 同じ時 L. Wittgenstein は Professor of Philosophy (University の職) に任命されるとともに Trinity College の Professional Fellowship に選任されている。彼は以前 Trinity College の Fellow であった (Potier (1991), p. 48 参照)。
  - 4) 1939年2月15日付のスラッファから Joan Robinson への手紙 (J. V. Robinson Papers, King's College, Cambridge)。

(1940) . . . . In July, Keynes and his mother, Florence Ada Keynes, Mayor of Cambridge since 1932, used their influence in high places to free Sraffa. . . . Keynes's efforts proved successful, and Sraffa was able to return to Cambridge University at the end of the summer, and to pursue his research" (p. 58).

第二次世界大戦の進行にともないイギリス政府は敵国籍の成年男子を拘束し、マン島に収容した。1940年5月に拘束は始まっていたようだが、スラッファがケイムブリジからマン島へ移送されたのは1940年7月4日であった<sup>1)</sup>。この時スラッファは病気で入院していたが、6月までには拘束状態にあったと思われる。Keynes Papersにはスラッファだけではなく Potier も言及している Rothbarth, Singer, Rosenbaum など、収容されたイタリアやドイツなど敵国籍経済学者の解放のためにケインズが政府機関、学術団体などにいろいろと働きかけたことを示す書簡や文書が残されていて、ケインズがスラッファ一人のために動いたのではないことがわかる<sup>3)</sup>。彼らはいずれもケインズと関わりのあった人たちであった。

このうち当時ケインズに特に関わりがあったのはスラッファと Rothbarth であった。この時ケインズは Faculty Board の Chairman を務めていて、その職務上 Rothbarth の身柄については関心を持たざるを得なかった。というのは、Rothbarth は1938年からケイムブリジで統計研究の助手 (Assistant in Statistical Research) を務めていて、また他の統計学関係のスタッフが政府機関に出向していたため、彼の不在は Faculty の講義、試験に支障を来すことにな

- 
- 1) Cuyvers (1983-84), p. 308 には「1940年5月13日, Rothbarth はスラッファとともに敵国人としてマン島に収容された」と書かれているが、Keynes Papers に保存されている一連の手紙から、スラッファがケイムブリジからマン島に移送されたのは1940年7月4日であったことがわかる。
  - 2) 1940年6月15日付でケインズがケイムブリジの病院にいたスラッファ宛に出した手紙 (カーボンコピー) が Keynes Papers にある。
  - 3) マン島に収容されたスラッファ等の救出のためのケインズの活動については、Harrod (1951), p. 497 参照。

るためであった。<sup>1)</sup> Faculty of Economics and Politics にとってスラッファの不在はそれほど深刻ではなかったと思われる。ケインズは1940年8月20日付でマン島のスラッファに宛てた手紙に、売りに出された Sir Francis Burdett の蔵書カタログを同封して、それに含まれるいくつかの文献の値踏み相談しているくらいであった (Keynes Papers)。

Potier はスラッファの解放のためにケインズとケイムブリジ市長であった母親が “their influence in high places” を用いたと書いているが、Keynes Papers に残されている文書にはそのような気配は見られないし、ケイムブリジ市長にそれほどの力があったとは思われない。

ところで Potier が書いているように、スラッファはマン島で上記の3人のドイツ人に会うことができたのであろうか？ その典拠は示されていないが、それは別にして、スラッファはそれ以前から彼らとは面識があったのである。すでに述べたように、Rothbarth は1938年からケイムブリジで Faculty of Economics and Politics に所属していた。Singer は1934年から1936年まで Research Student として King's College に在籍し、1936年10月には Ph. D. の学位を取得している。<sup>2)</sup> スラッファと面識があったと考えるのが自然である。Rosenbaum の名前はスラッファが編集した『リカード全集』の「総序」(Sraffa (1951)) に編集を手助けした一人として挙げられているが、Keynes Papers に保存されている1933年から1935年にかけてのケインズと Rosenbaum との往復書簡や Rosenbaum に関するケインズとスラッファとの往復書簡から、この頃までにスラッファと Rosenbaum は面識があったと考えられる。ケインズとスラッファは Rosenbaum を Marshall Library で採用したいと考えていたが、結局は成功せず、彼は LSE の図書館 (British Library of Political and Economic Science) へ行くことになるのである。

1) 1938年10月1日から University に Assistant in Statistical Research の職が創設され Faculty Board of Economics and Politics が任命権を持っていた。Historical Register (1942), p. 34 参照。

2) King's College (1963), p. 155, *Reporter* (27 OCTOBER 1936), pp. 231–232.

## 6 1943年にダブリンで発見された Mill-Ricardo 文書について

“On 5 July, Sraffa sent a full-blown report of the discovery to Keynes, who was in Washington at the time.<sup>38</sup>” (p. 67). “P. Sraffa : letter to J. M. Keynes, 5 July 1943, Keynes Papers. An extract from this report was quoted by J. M. Keynes in a letter to Jacob Viner of 17 October 1943, in *Activities, 1940-1944 : Shaping the Post-war World : The Clearing Union, The Collected Writings*, Vol. XXV, Cambridge University Press, 1980, p. 335” (p. 95, note 38).

スラッファ編集の Ricardo 著作集は1940年の夏までに6巻分がページ校正の段階まで来ていたが、スラッファはなお未発見の手紙などを探しもとめていた。1943年7月にダブリンで‘Mill-Ricardo papers’が発見されたことは、刊行計画を大きく変更させることになった。<sup>1)</sup>

ケインズの Viner 宛の手紙で引用されている Mill-Ricardo papers に関するスラッファのリポートを、Potier はなぜ1943年7月5日の手紙と考えたのだろうか。Potier が参照を求めているケインズ著作集の当該箇所では引用されているスラッファのリポートの日付はわからない。だが少なくとも Viner 宛の手紙で引用されたのは7月5日の手紙ではない。というのは、1943年7月5日付のスラッファからの手紙を受け取った時、ケインズがアメリカ・ワシントンにいたとは考え難いからである。Keynes Papers に保存されている資料から経過は次のようであった。

ダブリンで C. K. Mill と Prof O'Brien によって Ricardo の手稿や James Mill との書簡などがはいた箱が発見されたことは、C. K. Mill によって当時ケイムブリジにいた F. A. Hayek に知らされた（1943年7月2日付 C. K. Mill から F. A. Hayek への手紙<sup>2)</sup>）。Hayek は7月5日に手紙を受け取り、直ちにスラッ

1) Sraffa (1951), General Preface.

2) Hayek が所属していた LSE は戦争のためケイムブリジに疎開し Peterhouse (College) の宿舎を借りていた。

ファに知らせている。この知らせを受けたスラッファはまたその日のうちにケインズに手紙でこの件を知らせているのである（1943年7月5日付スラッファからケインズへの手紙）。手紙の内容から（スラッファは翌日ケインズを訪ねてロンドンへ行くつもりだと書いている）、そしてまた1943年7月6日付でケインズが C. K. Mill と O'Brien に手紙を出していることから、この時ケインズはロンドンにいたことがわかる。ケインズの Viner 宛の手紙で引用されているスラッファのレポートは、スラッファがダブリンへ行って実地に Ricardo の手稿や書簡を検分してからのものであり、1943年7月5日付のケインズ宛の手紙ではありえない。

## 7 『商品による商品の生産』の完成時期について

“From January 1955 onwards, he once more began delving into his old research notes for *Production of Commodities by Means of Commodities*, . . . . . He did not intend to publish the work immediately because he wanted to polish it further. But in 1957 he finished an overall draft while staying on the island of Majorca. . . . . The work came out during the first months of 1960, . . . . .” (pp. 70-71).

『商品による商品の生産』（Sraffa (1960)）が刊行を意図して旧稿の束からまとめられたのは1955年以降であることはスラッファ自身がその序文で書いている。<sup>1)</sup> 1955年の1月からというのは、Pollitt (1988) に引用された、1955年1月3日付の Maurice Dobb から R. Schlesinger への手紙がその根拠と<sup>2)</sup>思われる。しかし、この手紙から1955年1月にスラッファがマヨルカ島に滞在していたことはわかるが、実際に『商品による商品の生産』のための仕事をそこで開始したかどうかは確実ではない。Dobb は、スラッファが実際に彼自身の仕事をす

1) Sraffa (1960), Preface.

2) Pollitt (1988), p. 64. Potier は Pollitt 論文を利用しているが、Potier (1991), pp. 70-71 では Pollitt (1988) の参照を求めている。



ることはあまり期待できない、と手紙のなかで書いている。

スラッファが『商品による商品の生産』の原稿を完成させたのは1957年マヨルカ島においてであったと Potier は書いているが、その典拠は何なのだろうか。Potier は典拠を示していないが、筆者にとって初めての知見であり、典拠を知りたいものである。印刷用の原稿が出来上がったのがいつかはわからないが、印刷のための作業が始まったのは1958年の終わり頃になってからであると考えられる。というのは、Sraffa Collection に『商品による商品の生産』の組版見本 (Specimen Pages) が3種類残されていて、その最初のものの日付けが1958年12月12日になっているからである。また Sraffa Collection には『商品による商品の生産』の校正刷も3種類あり、最初のものには1959年9月4日 (4 SEP 1959) の印 (Cambridge University Press のスタンプ印) がある。3種類の校正刷と刊行本を比較してみると、スラッファは校正段階でも本文のほか、節立て、節の表題などで推敲を重ねていたことがわかる。

『商品による商品の生産』の英語版は1960年5月に刊行された。発行部数は2000であった。<sup>2)</sup>

(1991. 12. 6., 1992. 1. 7.)

### 参考文献

- Cuyvers, L. (1983-84), "Erwin Rothbarth's life and work," *Journal of Post Keynesian Economics*, Vol. VI, No. 2, Winter.
- Eatwell, J. and C. Panico (1987), "Sraffa, Piero (1898-1983)," *The New Palgrave, A Dictionary of Economics*, Vol. 4, Macmillan.
- 藤井盛夫 (1987), 「ケンブリッジ以前のスラッファ」『経済集志』第57巻第2号, 7月.
- Harrod, R. F. (1951), *The Life of John Maynard Keynes*, Macmillan.
- Historical Register (1942), *The Historical Register of the University of Cambridge, Supplement, 1931-40*, Cambridge at the University Press.
- Kaldor, N. (1989), "PIERO SRAFFA (1898-1983)," *Further Essays on Economic Theory*

1) 3点の組版見本にはそれぞれ "12 Dec. 1958", "10 Feb. 1959", "6 April 1959" という日付けが印刷されている。また各々には『商品による商品の生産』の本文5ページ分が印刷されている。

2) 『商品による商品の生産』の刊行年月、発行部数に関しては Cambridge University Press の Administration Director, Christopher Scarles 氏からご教示いただいた。

- and Policy, Collected Economic Essays*, Vol. 9, Duckworth (first published in *Proceedings of the British Academy*, Vol. LXXI (1985), Oxford University Press, 1986).
- Keynes, J. M. (1971-89), *The Collected Writings of John Maynard Keynes*, 30 vols, Macmillan.
- Keynes, Milo (ed.) (1983), *Lydia Lopokova*, Weidenfeld and Nicolson.
- King's College (1963), *A Register of Admissions to King's College Cambridge 1919-1958*, compiled by R. H. Bulmer and L. P. Wilkinson.
- King's College (1984), *Annual Report*, October, Cambridge.
- Marshall Library (1927), *Marshall Library of Economics Catalogue*, Printed for the Faculty of Economics at the University Press, Cambridge.
- Pasinetti, L. L. (1979), "SRAFFA, PIERO," *International Encyclopedia of the SOCIAL SCIENCES*, Vol. 18, Biographical Supplement, The Free Press.
- Pasinetti, L. L. (1988), 岡本義行訳「ピエロ・スラッファの思い出」『経済セミナー』4月号.
- Pollitt, B. H. (1988), "The collaboration of Maurice Dobb in Sraffa's edition of Ricardo," *Cambridge Journal of Economics*, Vol. 12, No. 1, March.
- Porta, P. L. (1984), "Piero Sraffa (1898-1983)," *Rivista Internazionale di Scienze Economiche e Commerciali*, Anno. XXXI, N. 1, Gennaio.
- Potier, J-P. (1991), *Piero Sraffa-unorthodox economist (1898-1983) : A biographical essay*, Routledge.
- Reporter* ( — ), *Cambridge University Reporter*, Cambridge University Press.
- Resident Members* ( — ), *Resident Members of the University*, Extra Numbers of *Cambridge Review*.
- Robinson, A. (1977), "Keynes and his Cambridge Colleagues," in D. Patinkin and J. C. Leith (eds.), *Keynes, Cambridge and The General Theory*, The Macmillan Press.
- Roncaglia, A. (1981), "Piero Sraffa's Contribution to Political Economy" in J. R. Shackleton and G. Locksley (eds.), *Twelve Contemporary Economists*, The Macmillan Press.
- Sraffa, P. (1951), "General Preface", *The Works and Correspondence of David Ricardo*, Vol. I, Cambridge University Press.
- Sraffa, P. (1960), *Production of Commodities by Means of Commodities, Prelude to a Critique of Economic Theory*, Cambridge University Press.
- Statutes (1985), *Statutes of the University of Cambridge and Passages from Actes of Parliament Relating to the University*, published by Authority, Cambridge University Press.
- Trinity College (1939), *Trinity College Cambridge ANNUAL RECORD 1939*, Printed at the University Press.